

リベラル教育*

鈴木 寛†

2004年2月27日

自己紹介

本日は、このような場でお話させていただく機会をお与えくださりどうもありがとうございます。

私は、国際基督教大学で、数学を教えています。International Christian University (ICU) が英語名です。学生数は大学院を入れても3000名足らずの小さい大学で、教養学部 College of Liberal Arts のみ、1学部の大学です。最近、大学教育改善関連の仕事に携わっていますので、最初に教養教育・リベラル・アーツということから考えてみたいと思います。

リベラル・アーツ

教養学部 ご存じのように東京大学にも教養学部がありますが、他に日本に教養学部がある大学があるでしょうか。少し前まで初年時の教育を担当する教養部を持っていた大学はありましたが、今はそれほとんどなくなってしまいました。ところが、教養部がなくなったとたんに教養教育の重要性がいろいろと指摘され始めています。今はどうも、教養教育が旬のようです。

そこで、ちょっと調べてみましたら、教養学部がある大学は、国際基督教大学、東京大学以外にも、埼玉大学、東海大学と、東北学院大学、さらに、国際教養学部があるのが、富山国際大学、東京女学館大学、倉敷芸術科学大学と、来年度からスタートする早稲田大学、秋田の国際教養大学です。しかし、英語名はまちまちです。たとえば、早稲田は、The International College of Waseda University、富山国際大学の国際教養学部は、Faculty of International Studies。東京大学は College of Arts and Sciences

*International VIP Club - The University of Tokyo (東京大学 International VIP Club でのメッセージ: 東京大学 学生会館分館 2 階)

†Electronic mail : hsuzuki@icu.ac.jp

となっています。ICU は College of Liberal Arts です¹。

今年度、ICU は文部科学省の COE² (Center of Excellence 研究拠点形成費補助金) に「平和・安全・共生³」で、COL (Center of Learning 特色ある大学教育支援プログラム・総合的取組) に「責任ある地球市民を育むリベラル・アーツ⁴」で選ばれました。特に、後者の方は、申請に関わったので、このタイトルにも特別な思いがあります。このような文部科学省の支援の仕方がいいとは思いませんが、何が良い教育なのかを判断する基準に対する合意が現在はまだありませんから、このようなプログラムで、教育についての様々な特色ある取り組みを選んで紹介し、大学の将来についてのいくつかのモデルを与えることによって、大学の教育改善のスタートをきるきっかけとして価値があると思っています。ともかくこの取り組み名「責任ある地球市民を育むリベラル・アーツ」にも、リベラル・アーツという言葉が入っています。

Liberal Arts リベラル・アーツとは何のことですかみなさんご存知ですか。このリベラル・アーツというのは、ヨーロッパの大学で長い間育まれ、現在のアメリカの教育の重要な部分を占めているもので

¹東京大学 (教養学部 College of Arts and Sciences)、東北学院大学 (教養学部 Faculty of Liberal Arts)、埼玉大学 (教養学部 Faculty of Liberal Arts)、早稲田大学 (国際教養学部 The International College of Waseda University)、東海大学 (教養学部 Faculty of Liberal Arts)、東京女学館大学 (国際教養学部 School of Liberal Arts for Global Studies and Leadership)、富山国際大学 (国際教養学部 Faculty of International Studies)、倉敷芸術科学大学 (国際教養学部 College of Liberal Arts and Science)

²文部科学省 21世紀 COE プログラム

³Peace, Security, and Conviviality – Foundation and Development

⁴A Comprehensive Effort in Liberal Arts to Nurture Responsible World Citizen

す。ある国語辞典⁵には、「職業に直接関係のない学問・芸術のこと。ギリシア時代からの自由民にふさわしい学問・芸術という意味に由来している。」と書いてあります。また、講談社の日本語大辞典⁶には、「中世ヨーロッパの学校で教えられた、一般教養としての学芸の総称。文法、修辞学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽の七科目。自由七科。」とも書いてあり、中世においては、(奴隷ではない)自由人が修めるべき学問の基礎とされていました。近代社会においては、さらに「良識ある市民として行動し、よりよい社会を建設する責任を担う人間を養成する教育」と理解されていると思います。東京大学ではこれを「市民のエリート」という言葉で表現しています。では、その教育内容はどんなものでしょうか。平たく言うと「すぐに役に立たないことでも良識ある市民の教養として学ぶべき核がある。その教育。」ということだと思います。このことから、古典、いわゆる Great Books を読むということも奨励されるわけです。

ICUのリベラル・アーツ では、ICUではどうでしょうか。ICUでは「リベラル・アーツ教育」の中心的な部分を「閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観から、開かれた価値観へと自己を解放(リベライズ)していくこと。」と表現しています。

「神以外の何ものをも神(絶対的価値)とせず(2003年度教養学部要覧5ページ)とも表現しています。学問や、理論や、知識、経験を絶対化せず、神に対して自己を相対化し、人間という存在の絶対化、すなわち単純なヒューマンイズムも絶対化しない、絶対者である神の前に立つものとしての謙虚さです。そして、神が造られ愛しておられるすべてを、同じ神に造られたものとして愛することだと思います。その人がどんな人であっても、他者を自分と同じように神様によって造られた被造物、自分を神様が愛しておられるように、神様が愛しておられるものとして受け入れること。そのこと自体が、開かれた価値観へ自己を解放していくことだと思います。イエスは「最も大切な戒めは何ですか」という問いに「神を愛することと、隣人を愛すること」と答えています。これは、神様が一番望んでおられることを表現したものですから、キリスト教の中心だと思っています。そのように、すなわち「神を愛し、

神が愛される我々の隣人を愛する」ように、自己が変革されていくことを中心としておいているのが、リベラル・アーツ教育だと思います。その意味で、リベラル・アーツ教育はキリスト教と深く結び付いています。

二種類のリベラル・アーツ これまでの話で、ヨーロッパの自由市民の教養としてのリベラル・アーツと、自己の価値観を解放、リベライズを目的とするリベラル・エデュケーション⁷が出てきたわけですが、これらは、どういう関係になっているのかちょっと気になりませんか。専門家に聞きましたら「自己の価値観を解放」ということも近世には多少はあったが、このことが協調されるようになったのは、20世紀の始め、社会主義体制の国がおこり、全体主義的傾向が強くなり、紛争と戦争が繰り返されたころだそうです。戦争のときはどうしても実用主義となり、すぐに役に立たないものは切り捨てられるからかも知れません。特にアメリカでは、何人かの学者が、共産主義に対抗する教育としてリベラル・アーツ教育の重要性を説いたとのこと。「実用主義ではなく、広い教養を身につけること、そして自己の価値観を常に解放する教育を大切にすれば、共産主義者にはならない。」確かに、リベラル・アーツはある意味で、全体主義の対極にある教育だと思います。

私は、このあたりのこと、この後の経緯に詳しいわけではありませんが、確かに今のアメリカの学校では、Critical Thinking 批判的・分析的思考の訓練がとても重視されています。

しかし、また、皮肉なことに、この自己の価値観の解放が、キリスト教の世界においても、人々が、無批判に信仰を持ち続けることを難しくしました。聖書学などにおいて、批判的・分析的研究がどんどん導入され、自由主義神学(Liberal Theology)の中には、信仰とはまったく関係なく、神学を研究する人がどんどん現れてきました。その影響で信仰を失っていった人たちもたくさんいると思います。

また他方で「閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観から、開かれた価値観へと自己を解放(リベライズ)していくこと。」の価値自体を否定した、キリスト教原理主義といわれるグループも強い影響を

⁷Liberal education, education that enlarges and disciplines the mind and makes it master of its own powers, irrespective of the particular business or profession one may follow. (<http://www.hyperdictionary.com/dictionary/liberal>)

⁵『国語大辞典』(小学館1986)

⁶『日本語大辞典』(講談社1990)

持つようになって来ています。そもそもリベラル・エデュケーション推進の出発点にあった、実用性や速効性を重視し、自己中心的な価値観のもとでの戦争へと動いていた過去への反省が全く忘れ去られ、まさに、自己中心的な価値観・正義感のもとで戦争へと向かう動きが強くなっていることに、正直危機感を抱いています。すこし違ったレベルでも、キリスト教世界自体、自由主義神学と根本主義神学または保守主義神学の対立から、分裂の時代が長く続くという状態になっています。

開かれた価値観

既にとらえたとは思っていません 開かれた価値観へと解放していく、または、されることは、誰にとっても必要なことだと私は思いますが、皆さんはどう思われますか。真理に到達してしまえばもうそれで良いのでしょうか。使徒のパウロも次のように書いています。

12:わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。

13:兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、

14:神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。(ピリピ 3:12-14)

パウロはある種の謙遜から、こう書いているのでしょうか。殆ど満点なんだけど、満点には足りないからこう書いているのでしょうか。私は、そうではないのではないかと考えています。

数学や科学に携わっている人はだれでもそうだと思いますが、自分たちが分かっていることはほんのごくわずかの部分で殆どは分かっていないと私も思っています。私のようなものでも、時々数学における新しい真理に導かれることがあります。一つ分かるとぱっと世界が広がる。しかし同時に分からないことはその何倍もさらに多くなっていく。すなわち、ほんの少しわかるたびに、自分が全く分かっ

ていないと言うことがますます分かってくるというわけです。パウロも、神様を追い求めることに目を開かれるたびに、どんどん神様のすばらしさ、神様から注がれている恵みの大きさに驚かさされつつ、ますます自分の閉鎖的・排他的・自己中心的な部分に気づかされていったのではないのでしょうか。しかしもちろんそれだけではありません。ここでパウロは、自分がそうするのは「キリスト・イエスに捕らえられているからだ」と書いています。どんどんやみの中に追いやられるというわけではないのです。そしていつか神様のところに召して下さるという大きな希望をもっているわけです。

この謙虚さの背景には、もちろん人間は不完全だということがありますね。それが半端な不完全さではないということです。この「閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観からの解放」は、誰にとっても、簡単ではないことも事実です。

ICU は戦後間もなく設立されましたが、設立の背景には、20世紀前半に人類は二つの世界大戦をしてしまった、なにかこれは教育が間違っていたのではないか、という反省があるわけです。自分たちは、ちょっとまずかった部分があるというのではなく、全く何も分かっていたいかなかったのではないか。科学は進歩しても、平和に兄弟姉妹として暮らすことができない。これはおかしい。真に平和をどう求めていくかを、根本から問い直そうと、同士があつまり、実験として、国際主義とキリスト教主義にのっとりリベラル・アーツ教育を実践するためにICUがスタートしました。わたしはまだこの実験が続いていると信じて、その実験に参加するため他の大学から移ってきたわけです。

宗教が邪魔 「開かれた価値観へと解放されるのが一番むずかしいのが、宗教を信じている人ではないか。」と思われる方もおられるのではないかと思います。これはなかなか厳しい意見ですね。わたしはその通りだと思っています。一つの宗教を信じているために、価値観の解放がむずかしくなっているのは、キリスト教ももちろん例外ではありません。

しかし、聖書で語られているイエスは、その様なある意味で宗教的な社会に来て「閉鎖的・排他的・自己中心的な生き方」から「神ご自身」に目を向けることを説いてまわったのだと思います。そして、かつこの「解放」は人にはできない。神にのみ可能だとして、その道を示されたのだと思いますが、みなさんはどう思われますか。

そしてこのことは、単にイエスの教えによっては可能にならなかった。キリストの十字架上の死により、私たちの根本的な罪のあがないがされてはじめて可能になった。しかし、このあがないのもとで、神様はわたしたちに、かみさまの心とでも言えるような聖霊を送って下さり、自己中心的な生き方から解放される命を与えて下さった。と聖書は教えているわけです。

閉鎖的価値観

すこし、具体例で、閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観について考えてみたいと思います。

礼拝音楽 1月に宗教音楽センターというところで、専門とは程遠い音楽のはなしをしました。テーマは、アメリカのキリスト教会において音楽の好みの違いによって一緒に礼拝が持てず、ある意味の分裂が進行している。好みを越えるものは何か。というようなテーマでした。難しい問題ですが、この背景にもある意味の「閉鎖性・自己中心」の問題がひそんでいると私は思っています。

70年代、ベトナム戦争が終り、なんとなく灰色の雰囲気のアメリカで、教会から若者が去っていった。それをつなぎ止めるように新しい教会でおこってきたのが現代の若者の音楽を取り入れた礼拝です。そういう教会には若者が集まってきた。しかし若者に戻ってきて欲しかった上の年代の人たちは、その音楽に平安が得られず、一つの教会でもべつべつの礼拝をもつようになって来ているのです。すなわち、traditional と呼ばれる、昔ながらの賛美歌を中心とした礼拝と、contemporary と呼ばれる worship song と呼ばれる新しい音楽中心の礼拝です。今は単に年齢の差だけで二種類に分かれているわけではありませんが結局、好みにあった礼拝形式、音楽によって教会が分かれていく傾向にあり、それぞれの教会に同じような嗜好の人が集まっているのです。

教会のように一致を求めるところですら一つになれない。アメリカだけでなく、多様な人が住んでいるところでは、結局、好みのあった人同士で非常に閉鎖的に基本的な生活環境を持とうとしてしまう。それが楽だから。そのほうが楽しいし、ぶつかり合うことも少ないから。そして言います。「他の人の生活を否定するわけではないですよ。その人たちは別のところで別の楽しみ方をすればいいでしょう。」他の生き方を一応言葉上は認めて自分たちは、

好きなもの同士であつまって生活する。これこそが私は、今の問題の根の深さだと思います。結局は、閉鎖的・排他的・自己中心的です。地球レベルで協調しなければいけない問題について、個人レベルでは他者に寛容な顔をしながら、難しい問題は、政治の責任にして、知らぬふりをする。これでいいのでしょうか。

一口に受け入れるといっても、遠くにいる人を受け入れるのは簡単ですが、近くにいって一緒に何かをしなければいけない人を受け入れるのは簡単ではありません。本能的嫌悪感を抱いてしまう相手に対して「こんなやつは人間じゃない」といった考えを乗り越えていけるのでしょうか。みなさんひとりひとりの人間の定義が、すなわち、神様が愛される人がどのような人かという定義が、地に足がついた形で広がっていくことを願っています。みなさんの周りにはそのような問題はありますか。

理系・文系 学校教育では、理系・文系という分け方の問題がありますね。他の切り方だと、真理探求型と実践型、みなさんはこれらのどちらかの価値観に、とらわれて他の価値観が理解できない、受け入れられないということはないですか。

便利さ 最近、携帯や、パソコン、インターネットなど便利な物がどんどんできていますが、それらは本当に生活を豊かにしているのでしょうか。私の専門ではありませんが、一見便利なものの普及は、経済活動の流れのなかで起こり、従って、便利さを強調され、宣伝される中でそのものを手にするかどうかを決めなければいけない。かなり偏った情報の中で、自分にとってそれがよいかどうかを判断しなければいけませんね。私は「便利」ということには必ず裏があると思っています。そのものに伴う「不便」さもバランスする程度に理解するまでは「便利」だということを認めないことにしています。同時に「めんどう」だという理由で、あることをしないこともやめようと思っています。「便利」さの裏を考えるのと同時に、「めんどう」の裏もなにかありそうだと期待するわけです。

時間のロスが少ない。この裏には、なにか失っている大きな物はありませんか。私は人を待つのが好きです。その人のことをずっと考えていられるから。最初は、ちょっと怒りながら、だんだん心配しながら。時間にしても、「今日は半日ずっと数学の問題を一問考えたけれど結局できなかった。」わたし

は、ここにこそ大きな価値があると思っています。読書も同じですね。でも、便利さをうまく使いこなせる人はやっぱり幸せかな。

ケチ わたしはかなりのケチなのですが、何か欲しくてある商品を探しに行つたとします。その商品の前で、わたしは、かならず次の質問をすることになっています。「わたしは、これを買わないと幸せになれるか。」「わたしは、これを買うと幸せになれるか。」自由さをつねに持つことはとても難しいことです。幸せになるのは、人生が豊かになるのは、難しいですね。皆さんには秘訣がありますか。

大切なもの 皆さんにとって一番大切な物はなんですか。わたしは、このような質問をよく学生にするのですが、みんないろいろなことを答えてくれます。私のホームページには、このようなトピックに関する学生のコメントもすべてタイプして載せています。自分の大切なものは分かつたとしましよう。人間はなんとも哀れな動物で、なかなか大切な物を大切にしながら生きられないのです。大切なものは、その時々、変わっていくかも知れませんが、大切なものを大切に生きていくといいですね。

リベラライズされることを求めて

聖書を一緒に読みませんか 私は、大学の中に住んでいるのですが、毎週1回夜、学生を家に招いて「聖書を一緒に読んでみませんか」という会を持っています。4~5人の小さな集まりですが、どうやら続いています。現在はマルコによる福音書を読んでいます。先週8章まで終つて、今年度は終りにしました。そこまでも、何度もイエスが弟子たちの鈍さを叱責されるところがあります。ちょっと読んでみましょう。

なぜ悟らないのか

14:弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。

15:そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。

16:弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。

17:イエスはそれに気づいて言われた。「なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。

18:目があつても見えないのか。耳があつても聞こえないのか。覚えていないのか。

19:わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあつたか。」弟子たちは、「十二です」と言った。

20:「七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあつたか。」「七つです」と言うと、

21:イエスは、「まだ悟らないのか」と言われた。

弟子たちは、かなりけちよんけちよんに言われていますね。みなさんは分かりますか。イエスは何を言いたいのでしょうか。イエスと一緒にいてもなかなか悟れないのです。

この後には、盲人の癒しの記事が出てきます。

22:一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願つた。

23:イエスは盲人の手を取つて、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。

24:すると、盲人は見えるようになって、言つた。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」

25:そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。

26:イエスは、「この村に入つてはいけな」と言つて、その人を家に帰された。

マルコによる福音書を読んでいると、いやされる人がたくさん出てきますが、殆どパターンといわれる

ものはないのです。すばらしい信仰の故に、いやされる人もいます。でもこの人はどうでしょうか。他の人に連れてこられ、この人は特に何もしていません。イエスを信じたり、イエスに病気をいやしてもらったりした人たちも、イエスとの出会いそしてその後はみな本当に違います。

先ほどの、パンのところでも、結局、神の方程式を無理矢理に人間のレベルで理解しようとしてもだめだよ、といている気がします。では、悟ることができるようになる鍵は何でしょうか。

オーム オームの信徒が通っていた玉龍寺（ぎょくりょう寺）の宮前心山（68）という住職のかたが、オウム信徒を評して次のように言っています⁸。

学歴とプライドの高さは高いが、現状への不満は強く、社会で孤立している。

自分を正しいとしている。閉鎖的。他者に開かれていない。ということだと思いますが、どうでしょうか。

なかなか自己義認から抜け出せない。このような、私達を、キリストは招いておられます。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。（マルコ 8:34, 35）」

長崎 最後に、私にとってとても、はっとさせられた経験が最近あったのでそのことをすこし話させて下さい。

1月に長崎に行って来ました。土曜日に一日仕事があり、日曜日と月曜日、二日間、今回は長女も連れていき一緒に、長崎の町を歩きました。長崎は、キリシタン殉教の地、原爆投下で一瞬のうちに約75,000人が亡くなり、ほぼ同じ数の人が傷ついた町です。その町の、永井隆博士の生涯に特に感銘を受けました。長崎は4回目なので、如己堂（己を愛するごとくの意、博士が最後の3年間を過ごした2畳の広さの家）を訪ねたのも3回目でしたが、今回はじっくり時間をかけました。永井博士は医者で、献身的な働きをしたと共に、白血病で動けなくなっ

てからも著作を通して、原爆の悲劇と、平和の訴えをこの2畳の家で続けた方です。その言葉をいくつか紹介します。

「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのは誰か？……私達だ。おろかな戦争を引き起こした私達なのだ。」

「お互いに許しあおう……お互いに不完全な人だから、お互いに愛し合おう……お互いにさみしい人だから、けんかにせよ、闘争にせよ、戦争にせよ、あとに残るのは後悔だけだ。」

「平和を祈るものは、一本の針をも隠し持っていてはならぬ。自分が……たとい、のっぴきならぬ破目に追い込まれたときの自衛のためであるにしても……武器を持っていたら、もう平和を祈る資格はない。」

核兵器開発を推進する人に広島、長崎を訪ねて欲しいと思っている人は多いかも知れませんが、私自身の中でも、完全非武装、非暴力での平和を望む心が風化しそうになってしまっているだけに、今回の長崎訪問はとても刺激的でした。自分の一番大切なものを人にあげたいと願ってそのように生きていった永井隆博士の人生から純粋に感銘を受けました。

私達が目を開かれるべき部分はたくさんあるように思います。

すべて真実なこと いつもみずみずしい、うるおいのある心でいたいものです。最後に聖書の言葉をもう一つ読ませていただきます。東京女子大学の図書館の入口にこの最初の言葉がギリシャ語で大きく書かれています。

すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあればそれらのものを心にとめなさい。（ピリピ人への手紙第四章8節）

神様抜きには達成できないことです。神様の素晴らしさを知ることによって、神様に少しずつ私自身を変えて頂けたらと願っています。しかし自分自身のすべきことは、やはり、一生、「閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観から、開かれた価値観へと自己を解放（リベラライズ）していくこと。」ではないかと思いますが、みなさんはどう思われますか。

⁸朝日新聞 2004.2.23 (朝刊)